5・15／2・26／太平洋戦争

海軍の思い出

〝最後の海軍大将〟の唯一の遺稿

井上　成美

〝最後の海軍大将〟だった井上成美氏が、昨年一二月一五日に亡くなった。八六歳だった。海軍軍務局長、航空本部長、第四艦隊司令長官、海軍兵学校長、海軍次官と、旧海軍の要職を歴任した生粋の武人ではあったが、日独伊三国同盟には徹底反対、次官になってからもいちはやく戦争に見切りをつけ、終戦工作をはじめるなど、その卓越した洞察力と実行力には定評があった。公私の別は厳格、清廉潔白な気性で、兵学校時代の教え子からは、戦後も慈父のごとく慕われていた。

この「海軍の思い出」は、昭和四五年四月末、井上氏の談話をテープにとり、まとめたもので、朝日新聞社発行の真継不二夫写真集『海軍兵学校』に掲載する予定だったが、「関係者に存命のものがいるので、私が死ぬまで発表したくない」との井上氏の希望により活字にならなかったものだ。五・一五事件、二・二六事件、そして太平洋戦争と続く日本の暗黒時代を、「海軍」のなかから透徹した目で捉えた、ひとつの歴史の証言ともいえよう。（編集部）

わたしが海軍兵学校（広島県江田島）の校長になったのは、昭和一七年の一〇月でした。

わたしは校長として、個性を出しすぎたくらいに出しました。そして、校長として、どういう方針ですかと問われて、なんにもないというのは、これは非常に無責任なことだと思いました。ことに、当時の日本が戦争をやってるときに、教育の方向を間違えたら大変だ。そこで、劣等者をなくせ、それでも及第できない者は海軍士官にすることはできないから退学だ、だから、退学者なんか出さないように教育をやってくれと、教官たちにいったのです。ある生徒は力学がレベルより以下で、ずっと四〇点くらいで及第点がとれない。ところが日曜に二カ月ぐらい呼んで勉強させたら、優をとった。うまく指導すれば、そうなる。それをわたしは、立派だとほめた。劣等者をなくすというのが目的だったのです。それが一例で、わたしはすべて、個性のないようなオーガニゼーション（組織）のプレジデント（長）というものは、なくてもいいと思っている。非常な高禄をいただいて、階級的にも非常な尊敬を国家からもらって、そうして若い人の一番大事な時期に、その人の将来を決めるというような教育、そこまで言うのは過言かもしれないが、そういうときにわたしはめぐりあわせたのですから。すこし、わたしは個性を強く出しすぎた感がありますけども……。

当時の兵学校生徒の中には戦争の話なんか面白くて、そうしてもうのぼせ上がっちゃって、サイン、コサインなんかどうなったっていい、戦争のたしにならない、というようなことを言う者もおりました。抜き身をもってワラ切ってみたり

する者もおりました。親に、卒業して戦地に行くのに刀が要るんだ、銘刀を買ってくれ、という者もおりました。そこで、わたしは刀を競うような気風は絶対にいかん、とやかましくいいました。銭形平次の八公。あれなんか、刀をもってない。十手だ。剣道の心得のない者が刀をもったって、刀を曲げて、刃をこぼすだけだ。人なんか切れるもんじゃない。だから、刀を競うなんてことはやめろ。ことに海軍士官が刀でどうといったってね、将校はピストルだぞ、といったものです。拳銃一つもっていれば、最後の時には口の中にピストルを向けてボンとやれば、立派に死ねるんだぞ。刀に何百円という金を出すのはバカだ、と禁じた。

ドイツ語の夢を見るまで

兵学校の校長になったとき、大変なことになったと思った。生意気盛りの小僧たちを預かって、これはほんとに教育勅語読んで暮らせるようなやり方じゃ、だめなんだと思いました。真から生徒たちの親と思って鍛えてやろう、と、こういうつもりでした。それには、教官がちゃんとしなければいけないと思いました。教官が生徒のごきげんをとるようじゃだめだ、と思ったので、オレはこういうつもりでいるが、よく守って生徒の教育をしてくれという意味で「海軍兵学校教育方針」を、わたしはまずつくりました。

話は少しそれますが、わたしは大尉のとき、まだドイツと戦時状態がすまないうちにスイスに行って、そうして、こんどは終わってから、ベルリンで勉強して、三年という約束だったから、あと半年残ったことがありました。ドイツでは、戦後の、マッカーサー元帥の仕事と同じことをやったんです。第一次世界大戦が終わって、ドイツの戦時物資を、連合国に引き渡す仕事です。工場へ行って物資を探し、これを軍用にできないようにこわして連合国へ渡す。それをちょうど一年間、ベルリンへ行ってやりました。その仕事がすんだから、あと半年、ベルリンで遊んでもいいと思ったが、なにしろあのとき、ベルリンの貨幣の価値がうんと下がりましてね、ふだんの日本の金が五〇銭というときに三銭五厘になっちゃった。われわれのひと月の手当なんてものは、ドイツの金にすると大変なものです。買いたいものは何でも買えた。これはバカになるな、と思いました。かせがなきゃ食えないから人間はいいけれど、ただ月給もらって、買いたいものは買える。出かけるのは一流のところへ大手振ってはいっていける。向こうは金持ちだと思ってる。町を歩けば女が食い下がるし、これはとても、ろくな人間にならない。もうひとつは、ヨーロッパ大陸に、英語というものは今日は非常に普及して、たいてい通じますが、あのころ、英語は通じません。大陸はやっぱりフランス語ですね。フランス語は、大陸では、上流の人がみな使う。アメリカの海軍士官もフランス語やってるくらいで。イギリス人はもちろん行き来はしていたが、フランス語を知ってなけりゃ、パリへ行ったって用が足りない、と、こういうわけです。

あと半年あるから、フランス語を習いたいから、フランス駐在にしてくれと頼んだら、すぐ許してくれました。さっそくパリへ行ってフランス語を勉強した。そうしてたところが、こんどはイタリアに行けっていうんです、イタリアの日本大使館に。イタリアへ行ってまたイタリア語をやらなきゃならん。それで、小学校の先生をしていたタイピストがいました。先生じゃ食えないから、というのでタイピストになり、午前中、わたしの事務所に嘱託で来る。学校の先生やったから、ものの教え方もうまい。「朝来たら、一時間だけはオレの先生をしてくれ」と頼んで、食堂で一時間勉強して、すむとこんどはわたしの仕事の「おい、これをタイプに打て」と、こういうわけです。

そこで、外国語の学習方法ですが、だれが行っても、外国語なら、その国に行って学ぶのがいちばんいい。その国へ行って、だれが日本語でイタリア語を教えてくれるか、日本語で英語やフランス語を教えてくれるか。そんなものを使って習うなら、日本で習えばいい。外国語は、向こうでやればいいんだ。現地で、その国の生活をしながら、その国の人に学ぶのがほんとうです。和訳なんか、必要ありません。わたしが「教育方針」の中で英文和訳をやめろと言ったのはそれです。それで、いちばん顕著なことは、その習ってる言葉で考える習慣をつけることです。ドイツ語を習ったときに、ドイツ人のあるおばあさんが「まだドイツ語の夢みないか」と毎朝、聞くんです。「まだだ」。ふた月たって「きのう、ドイツ語の夢みた」と言ったら、喜んでくれてね。その国の言葉で考える習慣がついたからこそ、夢の中でおれがしゃべってるんだ、と。しゃべってるということは、夢の中で考えているのだ。これだ、と思った。それでわたしは、英語の和訳なんかは害あって益なし、と言ったわけです。

わたしが横須賀の参謀長から海軍省出仕になると、永野修身さんが大臣で「お前に特別の任務を与える」というのです。「何ですか」と言ったら、機関科士官と兵科士官といっしょにしたらいいか、それとも、これまでのようにバラバラのほうがいいのか、ということが問題になっている。これまでいわゆる指揮権をもっているのは兵科士官だけで、機関科士官はエンジニアとして技術士官というものの扱いをしている。これでいいのかというので、一年間、会議を開いたそうです。その結果は、機関将校なんていうのをやめて機関科士官に戻せ、そうして兵科将校とは全然別の「あいつは技術

屋だ」というふうにしたほうがいい、という結論だった、というのです。その委員長が、わたしの軍務局局員をしてるときにわたしのそばにすわっていた豊田副武大将で、その人が軍務局長で委員長をしていて、永野さんに、兵科士官と機関科を分けるべきだ、という結論を出した。それで豊田君に「君はこれを実行するだけの勇気があるか」と大臣がいったら「私もありません」と、言った。なんだ、自分で実行しえないようなものを報告してもってくるバカがあるか、と怒ったということです。これ、ご破算にするから、君ひとりの考えでどうやったらいいか、これをもとにすべきか、豊田式にもっていくか、それとも機関科とか兵科とかいうようなものでなしに、機関科というのは兵科の砲術、水雷、航海、通信、そういう一〇カ月の専門課程に分類したほうがいいか、一人で研究して結論出せ、というのです。

豊田副武海軍大将

それでわたしは、兵学校へ行って三日ぐらい泊まりこんで研究しました。少将のときですよ。つぎに機関学校に行って研究しました。水交社に泊まって。まあ、行ったり来たりするのに、四、五日はそれぞれかかったでしょう。必要なものは、兵学校で教えてないことを機関学校で教える、機関学校で教えてないけども兵学校で教えている、その区別と、数学や何かの共通のものがどっちが進んでいるか。それから、機関学校なるがゆえにあり、兵学校になくて、そのために兵学校で生徒が苦しんでいる問題。これはメカニックスです。機構です。このハンドルを回すとこれがこう回る、これはこう、と、ただ結果だけを教えている。それの基礎を機関学校では教えている。

結局、わたしの結論は、機関学校へみんな入れたらいいというものでした。しかし、精神教育は兵学校と機関学校では違うところがあるのです。機関学校は従容死につくというのです。すぐ死ねということです。兵学校ではそんなこと言わない。死ぬこともあるかもしれないけれども、それは仕方がない。これはわたしは、兵学校のやり方のほうがいいと思いました。死にゃあいいんだろ、といったのでは困るのです。終戦のとき、陛下のみことばを無視して、なんだかんだと文句いって終戦をじゃましようとした陸軍大臣、参謀総長は、死んだでしょう。死んだらいいというもんじゃない。死にさえすりゃいいんだ、死にさえすりゃみんなご破算になる、なんて考えて死を急ぐ必要はない。また、死を飾ろうという、必要もない。自然に死ぬこともあるかもしれん。そういう考えで、職務の実行ということが根本だ。それがために、軍人は命を失うことがあるやもしれず、それを覚悟で、そういうことがあってもいい。鉄砲撃ちは鉄砲を撃つ職務につく。そのうちポンと死ぬかもしれん。死ぬとき、ぶざまな死に方をするかもしれない、どんな格好するかもしれない。しかしそんなことは問題ではない。そういうあり方が、わたしはいいと思った。葉隠みたいな、武士道を死ぬこととみつけたり、じゃあ、ちょっと死というものを大騒ぎしすぎる感じだ。死ねばみんな人によく言われるというような誤解を起こすのは大変なことですからね。あえて従容をてらう必要はない。

その点、兵学校の行き方のほうがベターだと思った。そのほかでは、わたしは機関学校の教育のほうがいいと思いました。

楽しかった「比叡」艦長時代

わたしが海軍大学の試験を受けるとき、ヨーロッパから帰ってきて間もないので、勉強するひまもなく、ドイツ語ばっかりやっていて勉強できない。二〇人の学生をとる場合、まず及第として口頭試験に呼ぶのは四〇人。ところが、わたしは、筆答の成績が六〇番だった。多田健三郎という人が、人事局員のときに「おまえは六〇番だった、けれども、外国へ行っていて勉強するひまがなかったのだろう。口頭試験に呼んでみようという会議の結果だったので、おまえ、呼ばれるよ」と教えてくれた。それで、当局もあてにしなかったのに、口頭試験は一番でした。

当時、海軍大学には乙種と甲種というのがあって、乙種は、砲術、水雷、通信、航海と分かれる前の教養学部です。そこで六カ月やってから、砲術学校、水雷学校、それから航海科学生になるのです。甲種というのは幹部学校。幕僚科。軍政部幕僚でもよし、軍令の幕僚でもよし。戦術、戦略の幕僚。高級幹部ですね。

大学にはいったのは大正一一年一二月で、みな四〇期で、私ひとりが三七期でした。海軍大学というところは、受験資格は大尉だった。しかも大尉で、海上勤務二カ年以上を経過した経歴がなければ受けることができない。わたしはもう、大学試験受けるときに、少佐になって帰ってきた。だから、海軍は規則を変えたんだそうです。「井上、甲種入学の規則変わったのは貴様のためだっていう評判だよ」といわれました。

わたしが海軍大学の教官になったのは昭和五年です。ちょうどその前にイタリアの日本大使館に行ったその日に家内が結核になったのです。さあ、これは大変だ、これこれこういう事情だ、もしこんど帰朝をさせられたら、海上勤務なんかでは家庭が破滅するから、ちょっとしばらく閑職に置いてくれ、といったら、大

学教官になった。それはありがたいと思うのですよ。だから、わたしは、大学教官を希望したわけじゃない。閑職にもってってくれ、海上勤務は困るぞ、と言ったところが、教官になった。閑職のようでも、忙しいようでもある。まあ、しかし、本を読む時間はありましたね。図書館に行って、自分の読みたい本を、さっそく借りに行きました。自分の時間はある。そしてまた、目標は大体決まっていた。青年の教育というか、少年の教育というか、どういうふうな教育をやるべきか、という。これで、ときどき、偉い人の事跡なんかを生徒に紹介して感激する、それを問々していいんだけれども、それだけじゃ、それを覚えることも、なんとなく地につかないと困るから、分析して、こなれるように——かんでふくめるように言いました。具体的に、大胆に、いろんなことも言いました。たとえば、一時間勉強するところを二時間すれば、倍の勉強やったことになるかというと、わたしはそうは思わない。一時間と二時間続けてやったって、それは一・四くらいの効果しかないとわたしはそう思う、というようなことも言いました。

わたしは、少佐で大学を卒業して、少佐の三年間、軍務局の局員になった。仕事は何がなんだかわかりませんよ。兵学校でも教えないし、大学でも教えないしね。軍艦での仕事をうまくやったからって、軍務局の仕事がつとまるもんじゃない。大臣の命令を「達」で出すんだなんて言われても「達」ってものもよく知らないし、諸令則という海軍の法規を書いたものには「達」というのがあるが、そういうものの性質もよく知らないし、五里霧中で、結局、はじめは属員に引き回される。軍属の属員室で局員が命ぜられて書いたりなんかしている。検査のハンコ押すのを、まずそこで書かなければならない。へろへろの少佐に何ができますか。わたしは困りに困って、法律みたいなものを読んでも意味がわからないんですよ。神田の古本屋へ行ってね、法学通論とか、そういうような法律の本を読みなおして勉強して、すこし、なにかわかるようになってね、結局は実務で勉強したんですね。必要に迫られ、そういうものを神田の古本屋で探しちゃ、勉強した。これは法律で出さなきゃならんか、海軍大臣の名前を出さなきゃならんか、それとも陛下のハンを押される軍令部で出すべきか。そういう区別というものがちゃんと、諸令則にあります。しかし、それ読んでもわからないんです。それで、法律をかみしめる力を養わなければこれはだめだと思って、法律の勉強をしたわけです。それが、わたしのデューティー（義務）です。結局、必要に迫られて、読むときは一生懸命です。真剣です。それでものがだんだん解けていくと、ああよかったな、という気持ちになりますね。自分でこれは知りたいと思ってひもとく本のことは、やっぱり早く覚えますよ。教官が黒板に向かって講義して、これを覚えろといわれたのとは全然違うんですよ。だからね、知りたいという意欲ができたら、もうそれは、半分学問したようなものですね。

「比叡」の艦長の時代がわたしの海軍での生活の中で一番よかった時です。あのときが一番楽しかった。一城の主っていう感じです。そうかといって、殿様みたいなわがままはしちゃあいけません。わたしが「比叡」の艦長をやめて横須賀の参謀長で、水交社で晩飯を食っているとき、「比叡」は陛下のお召し艦になるんで総員上陸をとめてあるということをきいた。しかるに、現艦長は水交社へ来てメシを食っている。お前の船は上陸停止しているんじゃないか、上陸停止の命令はだれが出したんだ、とわたしが聞くと、艦長が出すんですという。艦長の出したものを艦長が破っていいのかとなじった。そういう艦長がいました。非常にびろうな話をするけれど、あとで聞くと、その艦長の艦長室の前に兵隊で脱糞

建国200年アメリカの「ピープルの文化」をさぐる

アメリカの大衆文化

書き下ろしアンソロジー

本間長世
亀井俊介 編

●二、二〇〇円 新発売

☆武市好古（大衆演劇・映画）
☆常盤新平（雑誌）
☆中田耕治（ポーノグラフィ）
☆日向あき子（グラフィック）
☆J・M・ライリー（探偵小説）
☆平野敬一（漫画）
☆三井徹（ポップ・ソング）
☆白石かずこ（ソウル文化）
☆小野耕世（漫画）
☆後藤和彦（テレビ）
☆木島始（フォークロア）
☆R・リッシー（大衆小説と映画）

研究社　東京・新宿・神楽坂　振替　東京 83761

したやつがいるって話でした。そういう辱めを受けているのですよ。部下は敏感に見てますね、参謀長からしかられなくてもね。

それから、ある大将まで行った人ですが、「日向」の艦長でね、艦長が上甲板へ出てくると、たばこ盆のまわりに輪になってたばこを吸ってる士官室の士官たちが、さっさと下へみんなはいってしまう。艦長おりたか、もうおりましたと聞くと、上に上がってくる。その艦長が最後にどこかへ転任でその船を去ったとき、兵隊が塩まいて浄めたというのです。そんなことで戦できるもんじゃない。ところが、そういうのがだんだん目につくんです。

エリート意識のみの軍令部

職務が要求するだけの慎みというものは守るべきです。少なくとも、お上のお金と自分のお金と区別して使う、それが大事です。わたしが次官で着任したら、機密費を預かってる秘書官が、「次官、毎月機密費あげるようになってますが、どうしますか」というのです。なんだ機密費というのは、と聞くと、いや、十分お使いになれるように、大した額ではないが、俸給と同じぐらいの額のものを、毎月お渡しするようにしてありますという。何に使うんだと聞くと、勝手にお使いになればいいというのです。わたしはそんなものは要らない、おれは俸給をいただいているから、俸給なみの生活をすりゃいいんだ。それ以上の生活をお上が要求するのなら、それはお上の俸給が足りないんだから。機密費もらって、兵隊まで機密費分けていればそれはいいかもしれんが、機密費というのはそんなもんじゃない。大事なときに使うんだ。使い道を大蔵省に知らさなくてもいい使い方をするんだ。それが機密費だといった。大臣ももらっているのかと言ったら、あげてますという。しかしおれは要らない、要るときは頭さげてもらいにいくといいました。

その、ほんとの機密費を、わたしは使ったことがある。それはね、高木惣吉に教育局長をやめさせて、終戦にもっていこうと工作させたこと、これを極秘でやれ、といったことがあります。憲兵にみつかったらだめだぞ、と言うてね。お前に全幅の信頼をおくから、おれのとこへ報告に来たり出入りするとうるさいから来ないでいい。時間かけていいから、自由に勉強しろといいました。この事実はこうなんです。わたしは昭和一九年の八月に次官に就任した。戦況をきくと、むちゃなんです。これは負けだなと思ったから、すぐ米内光政海軍大臣に「この戦はだめですよ。だれが何といっても、このままでもっていったら、すぐだめになる。いまから極秘で、戦をやめるにはどうしてやめたらいいか、どういうふうにもっていったらいいか、高木に研究させますから実行しましょう」といいました。そうしたら米内さんは「よし、お前やれ」というので、大臣に、高木が勉強するために金が要ると思いますから、機密費二千円いただきます、と言った。その当時の二千円といったら、大佐の俸給の四カ月分の金ですからね。いいよといってくれて、それから秘書官に「おい、おれに二千円機密費くれ。何のために使うのかはきくな。いずれ、お前に白状するときがあるから、井上という男を信頼して二千円よこせ」といってから高木を呼んでね、「そっとポケットに入れてお

米内光政氏

五木寛之 討論集
視想への旅立ち
思想から視想へ！ 待望の討論集！

歴史・音楽・思想・演劇・運動・現代音楽・詩歌・表現・政治の各分野で活躍する九人の人々と過去を踏まえて現在を語り、未来への旅立ちを示唆する衝撃の討論集。

著者対談 菊地昌典・武満徹・内村剛介・唐十郎・寺山修司・山下洋輔・塚本邦雄・篠山紀信・高畠通敏

●好評発売中

定価850円

河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3－6
振替・東京10802 TEL(292)3711

け。二千円やるから、本買ったりとび回ったりする費用にしろ。なくなったらまたやるから」といいました。あと半年ぐらいしたら、また二千円やりました。そういう使い方をするのが機密費ですよね。

戦争がすんでから、あのときの秘書官がわたしの家へ来ましたよ。おい、君に約束したの、果たすよ。二千円ずつ二回、おれにくれと言ったじゃないか。あれは、高木にやって、この終戦にもっていく、その工作をやらせる、その車馬賃にやったんだ。いま白状する。これで、お前にいずれ言うといった約束を果たしたぞ、といったものです。

艦長にも機密費があります。月に二〇円ぐらいかな。やっぱり、たいていの艦長はポケットへ入れていたようですね。わたしが「比叡」の艦長に着任したら、主計長が来て機密費二〇円出しましょうか、という。あれは接待費だろうというと、そうです。そんなものは接待するとき、乗員のために必要があったら副長が使え。副長にまかす。おれは受け取らん。ハンコだけは押すよといいました。だから、へっぽこの艦長までそういうふうに、正当ならざる役得を使っていたのです。

航空本部長になって新軍備に関する建白書を出したのは、昭和一六年でした。たまたま、次期軍備計画案に関する軍令部側の説明を聞き、この案は「明治の頭で昭和の軍備を行わんとするもの」と思ったので、公式に直属上官である海軍大臣に提出したのです。あれは、資料を集めてというより、わたしはそれだけの、当たり前のこととしてやったことで、勉強も何もしませんよ。ただ、戦艦なんか造ったって、飛行機が進歩したらだめだぞ、戦にならないという考えは二、三年前の昭和一二年ごろからわたしの頭にあった。大きな戦艦なんか造るのはむだだと、会議があるたびに出したわけです。そうすると、何万トンの戦艦二隻、航空母艦も造ってくれ、ということばっかり要望がある。そこでわたしは会議の席で質問したんです。いったい軍令部はどういう戦をするつもりなんですか、と。どういう戦で勝てると思っているのか、と。戦のやり方というものに、戦の推移はこうなるという予想がつくならば、それに応じた軍備というものを考えるべきじゃないか。ただ、軍艦がほしいだけじゃ、はいはい、というわけにはいかない。日本じゃ、軍令部は絶対にそれを言わないのですよ。軍令部というのはね、海軍の象牙の塔ですよ。自分たちがエリートで、あとの有象無象は田舎侍だ、です。軍令部の要求というと何でも通る。優越感をもってます。

軍令部は毎年作戦計画というものを出します。そうして、陛下にご覧をねがう。結論として「現在の軍備で国防は安全でございます」と、そんな無責任な文句で結ぶのが慣例になっていました。そうしてお茶を濁す。わたしは、そんなこと言わんほうがいいと思う。「刻下の国防はこれでは不安があります。しかしながら、日本の国力からみて、これ以上の軍備はするほうが無理でしょう。したがって、そういう強国との関係は、外交でもっていさかいを起こさないようにしていくのが日本の生きる道じゃないかと思います」と、そのぐらいのことは陛下に申し上げたらいいんじゃないかと思うが、軍令部は「国防は安全です」と、いう。どう安全だと聞きたくなります。だから、軍令部というところにいる連中はさっぱり進歩しない。バカのひとつ覚えとわたしは言うんだが、なぜ進歩しないかというと、血族結婚ばかりやっている。いっぺん少佐ぐらいで軍令部にはいると、大佐になると課長にいく、少将になると軍令部の次長にいく、そういうのが多い。だから、エリート意識がある関係もあるし、作戦計画の秘密をもらされちゃ困るから、あまり親類をふやさないようにという意味で血族結婚したんじゃないかと思うが、軍令部というところは、ずうっと頭が停滞しているのです。海軍

世界政経

2月号　¥350

特集＝福祉国家の条件とは何か

社会的連帯と公共経済学……高瀬　浄
社会的自主管理への期待……小林多加士
経済民主化と大衆参加……新田俊三

▼座談会▲七〇年代後半への提言
正村公宏・後藤邦夫・丸尾直美

巨大都市分割再編論……伊藤喜栄
地域開発は福祉を生んだか……大原光憲
マイカー・マイホームの終焉……力石定一
老人と医療システム……水野　肇

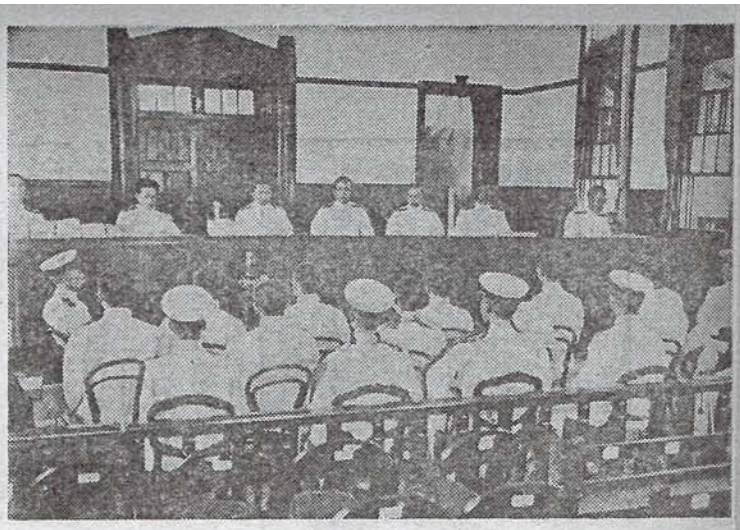
新国際経済秩序と福祉……角田　豊
ミニマム文化の役割……内山秀夫
科学・技術の隠された本質……山口幸夫

中東和平と民族主義の未来……板垣雄三

フォード訪中とその後……込山敬一郎
毛・周以後へ動く中国……島田好衛
東南アジアの石油と政治(下)……M・モロー
国際環境保全科学会議……島津康男

〈連載〉
自然宗教の活火山……森　竜吉
蒋介石と毛沢東……川合貞吉

㈱世界政治経済研究所
東京都千代田区丸の内1-4-5 ☎(214)4951



昭和八年九月　五・一五事件の海軍側公判

うわけですね。

昔、秋山真之さんという人は、アメリカへ行って勉強して、米西戦争を詳細に研究して、自分で戦術というものを出し

極秘に準備した特別陸戦隊

五・一五事件が起きた時、わたしはあんなことしたってなんになるものか、バカどもが、と思っていました。ただ人を殺し、総理大臣にピストルを向けて、なんになるか。あとをどうするんだということがなんにもない。ただ国内の治安を乱して、総理殺したってなんになる。つけ火をすれば、ほかの人があとは何とかやってくれるだろうぐらいの安直な考えでやっているのじゃないか、と。そんなやさしいものじゃないです。あれは、扇動するやつがあって、乗ったんだろうと、わたしは思う。

二・二六事件は、わたしは非常に事は重大だと思う。軍隊を使ったんだから。わたしは、五・一五事件の直後に軍務局の一課長にきました。五・一五事件は、陸海軍の若い者が話し合ってあんなことになって、海軍のやつだけが先に手を出した。立ち遅れた陸軍はくやしがっているに違いなかった。ああいう人間の心理として。ちょっとお株を取られたような形ですからね。だから、必ずやる。やるときには、必ずこんどは軍隊使う、とわたしはそう判断した。それで、すぐに海軍省に戦車をもってこい、といったので

省のほうは法制局に出され、外務省に出されるので、わりに鍛えられるんです。軍令部にはそれがないのです。だから、軍令部はいつでも時勢に遅れてる。時勢の先端を行くべきところが時勢に遅れて、昭和十四、五年ごろに、大きな軍艦を高い金を出してむりやり造ろうとした。山本五十六さんなんかもそう言ってましたね。一生懸命、造船の図面引いてたら、後ろから山本さんがたいて「おい、君ら失業するぞ」なんて。軍令部というのはほとんど海軍大学出身だけれども、結局、その人を教育する先生がいないとい

て、帰ってきて、大学で少佐なのに大佐ぐらいのえらい人たちを前に置いて講義した。そういう人が教官にいなかったのですね。

す。海軍省を陸軍のふらちな者に占領されたら、海軍の名折れでもあるし、海軍がちゃんとしていなければ国は非常に困る、と思いました。それで、戦車をもってきて、軍事普及の意味で見せるのだ、と言った。それから、東京の海軍省の中に通信隊があります。それは部隊ですから、小銃をもたせることができる。小銃二〇丁、あそこにもたせる。弾薬も置いといて。ただ、実弾は所長がカギをもって、何かのときに渡す。それから、横須賀の鎮守府参謀長にいましたから、こんどは軍隊をおれのほうで用意してやろう、反乱軍が来たらやっつけてやろう、ということで米内さんにそう言って、極秘に準備しました。横須賀に、特別陸戦隊というものを編成しました。そうして、いっぺんか二へん集めて顔合わせをしといて、これは海軍省の防衛にやるんだということは米内さんだけが知っていました。

しかし、海軍省の防衛といったって、陸軍の反乱軍が鉄道を押さえたら行かれない。それで、あのときの巡洋艦「那珂」の艦長に「なんどき東京へ、君の軍艦を派遣することがあるかもしれんから、昼夜、天候のいかんにかかわらず東京に行けるだけの研究をしておけ」と命じておきました。

二・二六事件のときにはね、新聞記者が副官のところへ連絡して「けさ、陸軍の軍隊が総理官邸を襲って……」というので、わたしのところへ電話が、副官からきたんです。そこへ、また新聞記者が、総理官邸を襲って岡田啓介首相がやられたらしい、という。それじゃ、陸戦隊をすぐやると陸戦隊用意を命じました。それで、九時ごろまでにすっかり準備した。しかし軍令部が茶々いれたものだから、東京へ来るのが遅れて、結局、海軍省に着いたのは午後になっちゃった。

わたしは、三年前に軍務局の一課長にきたとき、軍隊をもつほうの役目にきたから、このようにはじめからお膳立てを仕込んだのですが、わたしは何の疑問ももちませんでしたよ。こんな国賊みたいなやつ、やっつけていいんだ、と思った。衝突した場合には発砲も辞せず、ということです。もっとも、海軍省を攻めなければだめだ。ただ前を歩いても知らん顔しておれといいました。ところが行った水兵がね、陸軍の兵隊が海軍省と外務省の間を歩いている、やりましょうか、という。そんなもの、相手にするんじゃない、ここを攻めに来て、海軍省を取りに来たら警視庁が取られるような、あんなぶざまなことをしないために守るんだ、といって聞かせました。

大正一〇年のワシントン軍縮会議で日

二・二六事件 反乱軍のこもった山王下の料亭

本は、英米にくらべて損な比率の主力艦制限を受けることになりましたが、そんなことでケンカするのはバカらしい話ですよ。比率なんてものは、戦が始まりゃ、金持ちの国と貧乏の国とはだんだん開くばっかりです。そんなもので大騒ぎするより、仲良くしたほうがいい。戦前よく古賀峯一元帥なんかと話すときも、古賀さんがいったものです。これだっていいじゃないか。ええ、いいですよ。どうせ戦争の勃発時に、比率なんてものはぶちこわれるんだ。強いやつにはかなわないんだから、仲良くすることだねなんて、古賀さんとよく言ってました。

道理をわきまえた米内光政

山本五十六さんが有名になりすぎて古賀さんは隠れましたが、あの人も、非常にものの判断の正しい立派な人でした。要するに山本さん、堀悌吉、そして古賀、この三人がほんとうに緊密な連絡をとって、比率問題で、インフレと日本の財政を救ったわけです。あのことは非常に顕著な事柄じゃないかと思います。

堀悌吉さんは、山梨勝之進さんの下で軍務局長をつとめた人ですが、山本さんと同クラスで兵学校は一番でした。実に頭のクリアな、ものの考え方がひずまない、片寄らない人でした。わたしはあの人と「球磨」の航海士のときいっしょにいたが、ちょっと甲板であって言うことでも、禅問答みたいなこと言うので、あとで考えると、ああそれか、と思うことがありました。いつかこういうことを言ったことがある。「海軍士官で洋行して語学を勉強させられて、そうしてその語学がモノにならないのは英国に行った人だ、あるいはアメリカへ行った人だ」「そうかなあ、中学でも英語十分やって、また遠洋航海に行ったりして、それからまたイギリスに行った者はちゃんと完成しそうなものだが」と言ったら、堀さんが

山本五十六
連合艦隊司令長官

「そうじゃないんだ。日本で英語習っていくと、買い物でも何でも、ふつうたいていの用事は足るもんだから、これはいけると思って、勉強しないんだ。ところが、中学ではドイツ語もフランス語もない。勉強しろって外国にやられると、レストランでうまそうだと思っても、言葉を知らないから食べたい料理も食べられない。買い物でも同じだが、そういう不自由をしているから、それで本気になって勉強する。そうして現場でその国の生活をしながら勉強する。だから、かえってフランスやドイツへ行ったほうが、帰ってきたときには、英語を日本で一〇年も習ってイギリスに洋行したやつの英語より上手になる」。堀さんはそういう観察をしてた。うまいことを言うんですよ。堀さんというのは偉い人だった。

それからその当時のもうひとりの幕僚は海軍省の先任副官というか、それが古賀元帥でした。山梨、堀、古賀と三人そろっていたのです。たいしたもんでした。功績もたいしたもんですよ。軍令部が変なことをいってもがんとして聞かない。昭和五年でしたか、わたしは、その点はあの人は立派な人だと思いました

ね。とにかく、あの人に欠点を見ませんでした。欠点を見るとだめですよ。たとえばある人が、大将で、宴会がすんで、車に二升ぐらい乗せていくのですよ。何でもないです、金高にしたらね。そういうことを見せられて、いやだなあ、ああいうことをやってもらいたくないと思いますね。わたしはそういうことがきらいです。いやあ、あの人に頭さげたくないなあ、と思いました。

それから、参謀長をしてますとね、上海あたりで、司令官の中学の友だちで三菱の重役さんだとかなんとかいう人が来る。晩餐をあげるというのです。そうすると、結局、参謀長、機関長、幕僚がお相伴です。そうして、大盤振る舞いするわけです。公務でもなんでもない。海軍でもなんでもないのに、自分の中学の友だちが来たからといって、それを官費で接待するというのは、わたしはけしからんと思った。金にきたないというのは、わたしは非常にきらいです。人の上に立つ資格のないやつだというぐらいに、わたしは思ってしまうのです。側近の勤務をするとね、そういうところがあるんです。ほとんど、ない人はない。それもまあ、しかし、貴様は潔癖すぎるんだ、完全欲が多すぎるんだ、といわれれば、それでもいい。しかし、こんどはわたしが許しがたいと思うのは、太平洋戦争の始まるときの、ぐうたら兵衛に追従して国を危うくしたやつ、わたしはこいつらの首を切ってやりたいと思うぐらいに憤慨

2月特集号・350円

特集＝八〇年代―《破局》のイメージ

危機の構造と主体の条件……川上忠雄 湯浅赳男

〈政治篇〉

救国・革新の日本共産党の行方……津田道夫

保守情況が描く危険な構図……山川暁夫

極東軍事体制の新展開……藤井治夫

〈生活篇〉

現代食糧危機と農業の未来……玉城哲

コンピューター社会とCR……津村喬

〈思想篇〉

天皇制はどうなるか……松浦玲

新左翼の「党」形成は可能か……丸山照雄

ポルノ解禁幻想と大衆文化……田所泉

対談 非人称の時代への予感……五木寛之 丸山邦男

〈虚人列伝〉奈良林祥―女の味方で性芸術を売る月光仮面

〈調査レポ〉崩れた神話に苦悶する出版界

〈残酷物語〉琵琶湖総合開発の行方……本間義人

価値論の現象主義的基礎（下）……永井成男

未発表資料による北一輝の初期天皇観……松本健一

◆新春異色対談◆現代右翼・民族派の思想を視る

反共右翼からの脱却……野村秋介 鈴木邦男

現代評論社

していました。それで、わたしは兵学校の校長の時には兵学校にかざってある大将の額をみな降ろせと言った。だれとだれだけは残せというわけにはいかないから。兵学校の校長のときにわたしは大将の位がえらいなんてちっとも思いませんでした。思わせようたって無理です。それでちょうどいいんです。そんなもんです。ただ、要するに、オーガニゼーションとか法律とかいろいろの規則でもってその人を上に立てるような組織が出来ているから軍隊は動くんだけれども、ほんとうに喜んであなたの下で死にますというやつができるかしらん、とわたしは思いました。

米内さんのことはみんなよく知っているでしょう。派手なことはしない、それは実によく出来た人でした。評判は、太っ腹でなんでも部下にまかせるというけれども、さにあらず、どうして、どうして、ね。あの人はね、なんていっていいのか、中国の大人ということでしょう。大功は細瑾を顧みず、というようなところかな。だけれども、どうしてどうして、なかなか細かくてね、道理というものをちゃんとわきまえた上でやっているので、いけないことはいけないと言う人でした。なんでもめくら判を押す人じゃないんです。米内さんが総理大臣をやっておられたころは、そりゃあ、陸軍がじゃましました。結局、どうにもならなくなって逃げ出したのです。高木惣吉の『史観・太平洋戦争』、あれの中にそのへんのことが書いてあると思います。酒は強いってほうじゃない。ウイスキーを生では飲みませんね。必ず水を割って飲まれるんです。

そして、けっして乱れません。きげんがよくなって「酔っぱらったかな」なんてところでね、醜態を演じたこと、見たことありません。

軍備よりも外交の時代

アメリカ、イギリスとの軍備の比率は低いほうがいい、戦をすれば負けるから、なんとか外交でしのいでいかなきゃいかん、とわたしは思っていましたが、軍人としてそれを自分に言いきかせるということは悲しいです。そして、くやしいですよ。くやしいけれどもね、そういう国なんだから。自分よりも技術が進み、富もあり、人口もたくさんある、土地も広い、という国がある、ということは、仕方がない。もがいたって、これを脱けるわけにいかない。そういう世界の状況なれば、その中で、無理をしない範囲で立派な国になっていくほうがいいんではないか。そういうふうに考えた。

わたしは、ワシントン会議後の、海軍が縮小された軍務局の一課で少佐で局員をしていました。もうくやしくてしようがない。どんどん船は廃艦になって、わたしのクラスの連中も十数人クビになった。それも、自ら進んで志願した者もおりました。けれども、アメリカ、イギリスとそういうふうになって六割というふうになれば、これで適当なんじゃないかと思うようになりましたけれども、悲しいことは悲しい。どんどんどんどん軍艦が出来て海軍が強くなるのはいい気持ちですけれども、そうはいかないんだからしようがない、と思っていました。

戦はしないほうがいい、しかし、月月火水木金金で猛訓練をしている。そのジレンマは大変なもんだったろうと人はいうけれども、わたしはそれとは違いました。国の存立のためには立つ。国滅びるというのなら、国が独立を脅かされるときには、とにかく立つ。そのためには軍備というものが必要だ。国の生存を脅

かされ、独立を脅かされた場合には立つ。そのかわりに、味方をつくっておかなけりゃいけない。自分じゃ勝てない。正々堂々の主張をするならば味方ができる、とわたしは考えています。弱い国家を侵略してそれを征服して自分のものにしようということをする者は、必ずほかの国の批判にあって、みそかの晩の金勘定の清算をさせられる時期が来る、と思う。軍備というものは要らないじゃないか、戦しないのなら——そういう意味じゃないですね。

しかし、今はそういう気持ちが通じるような世界じゃない。だから、前のように一国一国が自分の国力相当な軍備をおいてがんばっていると、そういう時代じゃなくなって、やっぱり目的を同じうするような国と国が集団防衛ということをやる。これが、第二次大戦後の国家防衛のひとつの型になってるんじゃないかと思う。第二次大戦のときも、日本の大多数の者が日独伊同盟に加盟するのは集団防衛で、プラスであると思ったんだけれども、集団防衛という形だけはあっても、日本にドイツからどれだけの援助があるのか。何もできない。そういうことをすると、強い国と仲良くしていかなけりゃならんというのに、アメリカとも悪くなるし、イギリスとも悪くなるという意味もあって、ドイツから何らの恩恵をこうむらない。得するのはドイツだけです。

日本は損する。損するというのは、ドイツからたくさん援助をもらわんのに、日本は大国を敵に回すことになる——そういうのがわたしの持論です。

日独伊三国同盟に日本が加盟したのはドイツの電光石火的の作戦にすっかりキモを奪われたんですよ。

今は集団保障でいかなきゃだめだということです。自分の金で自分の軍備ということはもちろんだけれども、その軍備についても自分一人で自分を守れるかというと、これは不可能です。また、こっちに軍備なければ戦争はあるまいという安っぽい考えで軍備を軽蔑するのは、これは危険だ。わからないのがいるんだから。ソ連だって、国後、択捉を勝手に占領して、あれはもう、世界大戦でおれのものになったんだと、とんでもないことを近ごろ言いだしているからね。けれど、それを自分の力でどうしよう、といったって、できない。いずれは国際連合というようなもので裁判を受ける時期が来るんじゃないかと思う。まあ、とにかく長い目で見るよりしようがない。いまの時代は、集団防衛ということに考えを向けていくよりほかないと思います。

（いのうえ　しげよし・元海軍兵学校校長・海軍次官・海軍大将）

葉隠武士道に反対した合理主義軍人

篠原宏

〝最後の海軍大将〟だった井上成美氏が昨年一二月一五日夕死去した。享年八六。最後の海軍大将というのは終戦の三カ月まえの昭和二〇年五月一五日、最後に海軍大将になったという意味で、旧海軍の大将としては嶋田繁太郎、百武源吾の両大将が健在である。

井上氏は、ここ数年来病床にあって、最近では、意識もとぎれがちで、昨年一二月に会った人の話によると、顔をみてもだれだかわからず、名刺を見て「ごくろうさまです」といったという。

死去した一二月一五日午後五時すぎ、窓からベッドにもどろうとしている井上氏を奥さんが発見した。「どうしたのですか」とかけより脈をみると、とだえがちなので、かかえるようにしてベッドにあげた。そのとき、井上氏は正座して両手を前についた状態をとったという。電話で呼んだ近くの医者が来診してから、間もなく亡くなった。

「私がそばにいたら、こんなことにならなかった」と奥さんはくやむが、側近の人たちは、井上氏は庭に出て落日の海に最後の決別をし、ベッドの上で東の皇居に向かって死んで行ったのだ、最後の海軍大将らしい死であった、と推定している。

旧海軍では「サイレント・ネービー」という言葉があった。つまり、あまりしゃべらないということが美徳であると考えられていたのである。海軍軍務局長、航空本部長、第四艦隊司令長官、海軍兵学校長、海軍次官と要職を経た井上氏は戦後も寡黙であった。旧海軍時代のことをしゃべったり、書いたりする人が多い中で、昔の話を聞いても容易に話そうとはしなかった。そして「これからの日本は若い人たちの教育だ」と、横須賀市長井町の自宅で英語塾を二二年ごろから開いた。ハダで人格にふれた教育をするためには多くてはダメだというので、一〇人

以上の塾生はとらなかった。そんな井上さんが町の人たちの尊敬を集めていたことはいうまでもない。

こんなわけで井上氏が自分の海軍時代について書いたり、話したりしたことは非常に少ない。わずかにごく親しい人たちに話したこと、海軍兵学校の同期（三七期）会誌に書いたものなどである。ここに紹介した井上氏の「海軍の思い出」は昭和四五年四月末、井上氏の談話を自宅で約二時間にわたってテープにとったものである。有名な航空本部長時代の「新軍備論」、五・一五事件、二・二六事件、三国同盟などについての秘話である。これを起こした原稿は朝日新聞社刊の真継不二夫写真集『海軍兵学校』（四五年九月五日発行）の巻末に使用する予定だったが、「関係者が存命のものもいるので、私が死ぬまで差し止めて欲しい」との希望で、公にできなかったものである。井上氏が亡くなった今日、あらためて紹介する次第である。

明治の頭で昭和の軍備

井上氏の海軍時代での評価は旧海軍の人たちの中でも、賛否両論あることは事実である。否とする人たちの意見は、あまりにも正義感が強く、厳正であって癇癪もち、というのが多い。一方、高く評価する人たちの意見は、彼の合理性を貫いた見通し、厳正な公私の区別などについてである。いずれの評価が正しいのかは今後井上氏の意見や行動が知られるにつれて決まろうが、旧海軍にあって、まれにみる異色の人であったことは間違いない。彼の異色ぶりは若いころから「頭脳明敏、判断の迅速で正確なことは部内随一といわれ……」（次官就任当時の新聞評）ということで定評があった。

井上氏の海軍時代での第一に記憶に残る業績は、何といっても昭和一六年航空本部長時代、当時の及川海相に提出してにぎりつぶされた「新軍備計画論」であろう。「思い出」の中でも簡単にふれているが、その要旨は次の通りである。

一、航空機の発達した今日、これからの戦争では、主力艦隊と主力艦隊との決戦等は絶対に起こらない。

二、巨額の金を食う戦艦など建造する必要なし。敵の戦艦など何程あろうと、われに十分な航空兵力あれば、みな沈めることができる。

三、陸上航空基地は絶対に沈まない航空母艦である。航空母艦は運動力を有するから使用上便利ではあるが、きわめて脆弱である。故に海軍航空兵力の主力は基地航空兵力であるべきである。

四、対米戦においては陸上基地は国防兵力の主力であって、太平洋に散在する島々は天与の宝で非常に大切なものである。

五、対米戦ではこれらの基地争奪戦が必ず主作戦になることを断言、換言すれば上陸作戦ならびにその防御戦が主作戦になる。

六、右の意味から基地の戦力の持続が何より大切なる故、何をおいても、基地の要塞化を急速に実施すべきである。

七、従ってまた基地航空兵力第一主義で航空兵力を整備充実すべきである。これがため戦艦、巡洋艦のごときは犠牲にしてよろしい。

八、次に日本が生存し、かつ戦を続けるためには、海上交通の確保はきわめて大切であるから、これに要する兵力は第二に充実するの要あり。

九、潜水艦は基地防御にも、通商保護にも使える艦種なる故、第三位に考えて充実すべき兵種である。

井上氏が「新軍備計画論」を提出するに至ったいきさつはこうである。

昭和一六年一月、軍令部は膨大な次期軍備計画（〇五計画）を立案して、その予算化を海軍省に求めるため、省部首脳会議が大臣官邸で開かれた。この計画は戦艦（大和型）三、超巡洋艦二、航空母艦三、巡洋艦（中）五（小）四、駆逐艦三二、潜水艦四五、その他合計約六五万トンというものである。

井上氏も航空本部長として出席した。軍令部主務部長から内容の説明があり、時局がらぜひともこれだけは実行に移す必要があるから、本年度の予算にとってもらいたいとの強い要求があった。海軍省側の一同は、その額の膨大なのをみてその実現は容易ではないといっても、鼻息の荒い軍令部の要求なので、困ったことだが仕方がないと、その計画の内容を批判する人もなかった。しかし井上氏は軍令部の計画はあまりにも粗末で、とても日本の国防のことを真剣に研究したとは思われない。放っておいては大変なことになると思い、次のように発言した。

「この計画を拝見し、ただいまのご説明を聞くと、失礼ながらあまりにも旧式で、これではまるで明治、大正時代の軍備計画である。説明によると、ただ米が戦艦をA隻持つから日本は8_10A隻必要だ。米が空母B隻持つからぜひ空母8_10B隻なければならないといった考え方で、米の軍備に追従して、各種の艦艇をその何割かにもってゆくだけの月並みの計画で、その間、いったん米と戦争になったら、どんな戦をする事になるのか、その戦は何で勝つのか、それには何が、何程必要なのか、といったような説明もなければ、計画にも現れていない。

日本のような国情の国は創意豊かな軍備を持つべきであるのに、この計画には少しも自主性もなければ、特異性もない。かような選択の計画に膨大な国費を費やし得るほど日本は金持ちではないし、かりにこの計画通りの軍備が出来たとしても、こんなことで米に勝てるものではない。同じ金を使うならもう少し気のきいた使い方をすべきだと思う。軍令部はこの要求を一応引っ込めて、とくとご研究になったらよいと思います」

当時としては異例に激しく、軍令部の面目丸つぶれといった発言であったが、軍令部側からは一言の反論もなく会議は

終わった。

波紋は大きかった。軍令部三課長の柳本大佐は「あんなにひどくやられたのでは軍令部の面目丸つぶれで、私は切腹ものだ」と言ったという。

卓越した洞察力

そこで井上氏は「井上は人のやる事をぶちこわすことばかりやる」と言われるのも不本意なので、約一週間かかって年来の持論である「戦艦不用論」と「海軍の空軍化」を骨子とした「新軍備計画論」（機密第七九八号文書）を書きあげ、タイプにして及川海相あてに提出した。提出の際「これが商人なら受け取りを一筆してもらいたいところだ。確かに受け取った、と言ってくれ」と念を押し、海相は「確かに受け取ったよ」と言ったというが、結局この文書は握りつぶされた。

井上氏の海軍時代の足跡を見てみると、第一に感じるのは、卓越した洞察力と実行力である。「新軍備計画」の提出は遅きに失した感があるが、その当時としては航空本部長として精一杯の抵抗であろう。次官時代、就任いち早く戦争に見切りをつけ、高木惣吉氏に命じて終戦工作を始めさせたのもそれである。この彼の素質は若いころからのものだったようだ。昭和七年、軍務局第一課長の時代、五・一五事件が起き、二・二六事件が起きることを予想して、一個大隊の特別陸戦隊を用意させたというのもその一例である。

日独伊三国同盟に米内（海相）、山本（次官）、井上（軍務局長）のトリオが反対であったことは従来からよく知られている。三国同盟に反対した井上氏の理論は今になってみると明快である。

つまり同盟を結んでもドイツは日本に対して何も援助ができない、かえって大国を敵にまわして損をする、という理由である。

軍務局長時代をかえりみて、井上氏は「この二年間は、その時間と精力の大半を三国同盟問題に、しかも積極性のある建設的な努力でなしに、ただ陸軍の全軍一致の強力な主張と、これに共鳴する海軍若手の攻勢に対する防御だけに費やされた感あり」とのべている。

この間の事情については米内、山本両氏の伝記などで詳述されているが、井上氏はこう語っている。

陸海軍の交渉回を重ねるに従い、論争の焦点はだんだんしぼられてきて「独又は伊が戦争状態に入った場合は日本は自動的に戦争に加担する」との条文一つに帰し、陸軍はそれでいいのだと主張するのに対し、海軍はこれに絶対反対で対立するようになり、またそのころには海軍で反対しているのは大臣、次官と、軍務局長の三人だけだということも世間周知の事実になってしまった。

日独伊三国同盟は昭和一五年九月、及川大臣、豊田次官の時結ばれ、日本海軍数十年の伝統を破って海軍までが親独に踏み切った。

その後ある席上で「われわれが生命を賭してまで反対した三国同盟に、その後一年たつと、いとも簡単に海軍が同意したのは、いかなる理由によるか」と当時の責任者にたずねたら「君たちの反対した自動的参戦の条文を抜いてあるので、あとは何も問題はないんだよ」との答えだった。独が不徳千万な侵略戦争をやっている最中であるという大事なことを考えもせず、こんな条約を結ぶとはのん気というか、おめでたいというか、全く評する言葉なしで、ただ唖然とするだけだった。

冷静な教育者として

井上氏のもう一つの面は公私の厳格な区別であった。「思い出」の中でも機密費のこと、比叡の艦長の話などが語られているが、戦後の苦しい生活の中でも、この信念は貫かれたといってよい。次官の

2月号 1月10日発売 定価480円

〈特集〉教師に責任はないか
私の中学時代……松田道雄
教育における能力主義と平等主義……日高六郎
相談したら茶化さないで……中学生の座談会
教師を追いつめるな……野呂重雄
桎梏の情況から……今福昭六

連載劇画「はだしのゲン」戦後編⑥ 中沢啓治

月刊 市民

日本「市民」列伝⑥
市井の数学者・小倉金之助……しまねきよし
海峡の女たち……林えいだい
飛騨高山の水騒動……大森清男
「家元」生協運動の破綻……中村幸安
福祉どれい工場の叛乱……高杉晋吾
市民の視点／市民の法律／国際だより／読者から／住民と消費者の運動月表／ミニコミ

発売・れんが書房新社 03(351)2465
編集・「市民」編集委員会 03(352)6048
新宿区新宿1-9-4 御苑クリーンハイツ

恩給は大将の恩給よりよかったが、安い大将の恩給を希望した。見かねた昔の教え子たちが、何がしかの援助を申し出た。また病床に伏してからは健康保険にかかれるよう会社の顧問になることを申し出たが、なかなか受けようとはしなかった。困った教え子が「井上さんはいつも教え子は子供で校長は父親だと言われたでしょう。父親が年をとれば、子供が小遣いをあげるのはあたりまえでしょう」と説得して、やっと承諾したということである。

戦後、井上氏のように、教え子たちに敬愛された人も珍しい。兵学校の校長としての在任期間は昭和一七年一〇月二六日から一九年八月までのわずか二年足らずであった。しかし、この間に生徒教育のため教官たちに自ら筆をとって「教育方針」を書いたこと、「歴代大将の半分は国賊だ。学生の手本になるものはほとんどいない」として、教育参考館の歴代大将の額をはずさせたことなど、井上氏のその当時のエピソードの真意が次第にわかるにつれて、教え子たちの尊敬の念は深まっていった。

昭和一九年になって、当時、一刻も早く即席の教育をして卒業させようとしていた海軍首脳の意に反して、井上氏は生徒の軍事学の講義を減らし、普通学の時間をふやした。生徒たちはいぶかったが、彼の真意は、この戦争にこの若者たちは間に合わないというヨミがあった。戦争に負けて、世間に放り出される若者に必要なのは軍事学でなくて、普通学であるという意見は、結局正しかったことになった。

英語を最後まで続けた、英語の教育に英英辞典しか使わせなかった、数学のためには全員に計算尺を使わせたなど、彼の教育者としての指導はすぐれたいくつかの例があげられる。

葉隠のような武士道に反対し、生徒に高価な日本刀を持つことを禁じ、生徒の動揺を防ぐために教官に戦場での話を禁じたなどは、彼が徹底した合理主義者であったことと同時に、冷静な教育者であったことを示している。

軍人としての井上氏は昭和一六年八月、第四艦隊司令長官としてミッドウェー海戦にも参加している。

「私は第一線の指揮官としてはダメでした」として、この間の事情は多くを語っていない。

たしかに戦略家として、また教育者としての井上氏は多くのすぐれた足跡を残しているが、彼のすべての分野での真の評価については、彼が「後世史家の批判を待つ」といっているように、これから決まることであろう。

最後まで住んでいた海のみえる山の上の自宅は「死んだら君たちのクラブに使えよ」と、生前、井上氏は訪れる教え子たちに語っていた。いま、この人たちがその維持について「記念室を作って保存したい」と相談をしている。

（しのはら　ひろし・朝日新聞調査研究室主任研究員）

風声

ある日の午後。家の中にいると、サイレンの音が聞こえる。急いで外に出てみたが、人影もない。ようやく通りかかった豆腐屋さんに聞くと「なあに、交通事故だべすか」と、こともなげに言う。しかし、しばらくすると再び、けたたましいサイレン。村の常備消防車の音だ。やっぱり火事である。飛び出すと、筋向かいのかっちゃんが、「なあに、開拓村の方だずっ」と言って引っ込んでしまった。どうやら、開拓地の友人の家の反対方向らしい。

夜になるのが待ち遠しかった。農集電話が通じるからだ。八時が過ぎた。「もしもし安子。元気か」「ううん、こねだ風邪ひいでえらい目にあったどもよ、ようやぐ元気になった。今、乳しぼり終わったどごだ」「あのな、今日火事あったべ。いやあ心配してよ。こんなにさめぐなって燃えてしまったら、どうすべど思って……」「あ、そだず。おら方の反対側の開拓だ。焼げだ人さば悪どれっ。切れっ」「なしてよ、まだ話こあるのに」「わがね、わがね、おやじがら電話くるば」。

安子はむこうから電話を切った。夜半にまた電話をしてみると、八時すぎに話し中だったり居なかったりすると、出稼ぎ先の夫が大変怒るという——「やぎもちやいでよ」。

電話が架設されて、夫の肉声が聞けるとあんなに喜んでいたのに、文明の利器も思わぬ呪縛を、必死に働いている女たちに課している。

（一条　ふみ（文集発行人）岩手県一戸町）

も心配すな」「まだおめ、缶詰め工場さ行ぐのが」「いや、もう少しでやめだ。仕事ねぐなるんだ。魚の缶詰めもさっぱりさばげねえどよ。また、くびった切られるべえよ、あはは」「冬ばりも体大事にしたらえがべ。父ちゃん正月来るが」「来るべえよ。残業もねずものよ。まあんつ、カネに困ってまた、水呑み百姓さ落づべよ」「水呑み百姓だばまだえがべ。カネ呑み百姓だべよ」「そだ、そだ。あっ、八時過ぎでらっ。早ぐ電話切